

第2部： 特別講演 **Rhan 2: Y Ddarlith Arbennig**  
ウェールズの伝統楽器クルース

寺本圭佑

**The crwth, a traditional instrument in Wales**  
**Keisuke Teramoto**

Abstract: The crwth is a stringed instrument which has been played in Wales for centuries. It is derived from the ancient Greek lyre. Originally, it was plucked by fingers or using plectrums, and it was converted to a bowed string instrument around the tenth century under the influence of the Arabs. The crwth was used in the music of the Bardd, who were professional musicians in medieval Welsh culture. Bardic tradition remained, especially in the north of Wales, and the last bardd who played the crwth was Dafydd Rowland (d. 1684) of Llandrillo, from Bala in Gwynedd. Although the crwth gave way to the violin, a newer instrument, in the eighteenth century, the crwth was still used in folk music. The last famous crwth player was John Morgan of Newburgh, Anglesey, who lived as late as the early nineteenth century. The somewhat noisy sound of the crwth did not suit the tastes of the nineteenth-century audience, and it was not until the late twentieth century that the unconventionality of the sound of the crwth began to be accepted again.

クルースは古くからハープとともにウェールズで伝統的に演奏されてきた弦楽器である。18世紀から19世紀に作られた実例が4台現存する。

一番古いクルースは1742年にカーナーヴォンの **Richard Evans** によって制作されたもので、カーディフ近郊セント・フェイガンズの民俗博物館に保存されている。

アベラストゥイスの国立図書館にも古いクルースが残されている。これは、元々 John Jenkins of Ceri, Montgomeryshire (1770-1829) が所有していたもので、1907年、同図書館の設立者 Sir John Williams によって寄贈された。

三つめは、イングランドの考古学者 James Kendrick が1843年にウェールズで購入し、ウォリントン博物館に寄贈したものである。

4つ目はアメリカのボストン美術館に保存されている。これは19世紀の Owain Tudur の作で、後にイングランドの楽器学者、Francis W. Galpin (1858-1945) の手に渡った。その後、1916年にボストンの William Lindsey (1858-1922) がガルピンから買い取った。

日本でも浜松市楽器博物館や国立音楽大学の楽器学資料館などにクルースが展示されているが、すべて古い楽器のレプリカである。

クルースの弦の数は通常6本で、猫の腸をよって作られたガット弦が張られている。これらの弦はマンドリンのように2本ひと組の「複弦」となっている。

15世紀に活躍していたウェールズの詩人 Gruffydd ap Dafydd ap Hywel の詩に、6本のペグと6本の弦が張られたクルースの描写がみられる。

4本の弦は指板の上にかかっており、これらの弦を弓でこすって旋律を演奏する。残りの2本は外側に斜めに傾いており、指板から逸れている。この弦は左手の親指で弾いてピチカートのように演奏される。この傾いた弦は音程を変えることはできず、いわゆる「ドローン」弦による伴奏として演奏されていた。

クルースの駒はヴァイオリンのように弧を描いておらず、平坦な形をしている。したがって、弓で演奏する際に6本の弦が同時に鳴ってしまう構造になっている。

駒の片側は共鳴胴に開けられた穴の中に入っており、共鳴胴の背面に接地している。ヴァイオリンの共鳴胴の中にも、「魂中」と呼ばれる柱が入っており、共鳴胴の前面と背面をつなぐことによって音の響きを豊かにしている。クルースの駒はこれと同様の効果をもたらしている。ヴァイオリンの魂中はクルースから派生したのだという説もある。

英国王ジョージ4世に仕えたウェールズ人ハープ奏者 Edward Jones (1752-1824) は1784年の著書の中で、クルースの一般的な調弦法について記録している。それは、高音域の第1弦と第2弦がDのオクターヴ、第3弦と第4弦がCのオクターヴ、そしてドローン弦の第5弦と第6弦はGのオクターヴで調弦されるものだった。つまり、クルースは基本的に2本の弦が一組となるGCD、ソ、ド、レの3つの弦が基調となっていた。

ところが、イングランドの作家 William Bingley (1774-1823) の *A tour round north Wales* (1800) では別の調弦法が記されている。ここでは、高音域

の第1弦と第2弦がBのオクターヴ、第3弦と第4弦はEのオクターヴ、そしてドローン弦の第5弦と第6弦はAのオクターヴ、つまりAEB、ラ、ミ、シに調弦されている。これはヴァイオリンと同じ5度の音程関係なので、クルースの調弦法はヴァイオリンの影響を受けて変化していった可能性がある。

6世紀イタリアの司教 Venantius Fortunatus (c. 530-c. 600) の詩にクルースに対する言説が見られる。「ローマ人はライアで、野蛮人はハーブで、ギリシア人はアキレウスのライアで、ブリトン人はクロッタで汝をたたえしめよ」。

ここで「クロッタ Crotta」として描写されている楽器がクルースを指していると考えられている。ウェールズ語の Crwth という語はアイルランド語で弦楽器一般やのちにハーブのことを指すようになる Cruit と同源であるとされる。

この詩の中ではライアとハーブ、アキレウスのライア、クロッタという4つの楽器の名前が現れるが、近年の研究ではこれらはすべて同じものを指していると考えられている。

ライアという弦楽器はもともと古代ギリシアが起源で、11世紀ころにハーブが登場する前は全ヨーロッパで広く演奏されていた。特にこの楽器はヨーロッパ北部のスカンディナビア半島やブリテン島に長くとどまり、民族楽器として定着するようになった。エストニアでは現在でも talharpa というライアの末裔である楽器が演奏されている。

7世紀イングランドのサットン・フー遺跡から出土した6弦のライアの復元楽器が大英博物館に展示されている。ウェールズのクルースも元々はこれと類似した楽器だったのであろう。音楽史の定説では、10世紀から11世紀頃にかけてアラブ社会から、弦をこする弓がもたらされるようになったとされる。よって、10世紀以前のクルースは弓ではなく、爪や指、あるいはプレクトラム（バチ）で弾かれていたと考えられる。

11世紀頃に6弦のクルースは、ウェールズの職業音楽家「バルズ bardd」の楽器として採り入れられるようになった。身分の低いバルズは3本弦のクルースを演奏しており、座って演奏することが許されず、その報酬もわずかだったという。

Hywel Dda (d.950) のウェールズ法にもクルースはハーブや角笛とともに登場する。「ペンケルズ pencerdd」と呼ばれる身分の高い音楽家には王や領主から直々にクルースやハーブ、角笛といった楽器が与えられ、奏者が死んだときにはその楽器を王に返さなくてはならなかったという。文書として現存するウェールズ法は、古くても13世紀頃のものとするが、クルースやハーブに関する部分は、これよりも古い慣習が記録されたものなのではないだろうか。

クルースはウェールズの聖職者 Giraldus Cambrensis (c. 1146- c.1223) の著作『アイルランド地誌』(1188)にも現れ「アイルランドで用いられ楽しめる楽器は二つだけ、すなわちハープとティンパナムである。スコットランドではハープ、ティンパナム、クルースの三つ、ウェールズはハープ、笛、クルースである」と書かれている。

カンブレンシスによると、クルースはスコットランドとウェールズで好んで演奏されていたことがわかるが、12世紀アイルランドの図像資料にもクルースと思しき擦弦楽器が残されている。

また金属弦が張られたクルースのような楽器であるティンパンは、ウェールズでも演奏されていたようだ。1330年頃のウェールズの手稿譜 (AB MS Peniarth 20) に次のような記述がある。

「主要な技芸が3つある。すなわち、弦楽器と管楽器と言葉である。主要な弦楽器の技芸が3つある。すなわち、クルースとハープとティンパンの技芸である。主要な管楽器の技芸が3つある。すなわち、オルガンと笛とバグパイプである。主要な言葉の技芸が3つある。すなわち、詩作と朗読とハープによる弾き歌いである」。

このように、ティンパンはクルースやハープと共にウェールズの主要な弦楽器として見なされていたのである。

13世紀後半にウェールズを併合したエドワード1世の宮廷には、多くのクルース奏者たちが雇われていた。その後のエドワード2世の宮廷で雇われていたクルース奏者たちは名前が残されているものもいる。

イングランド、グロスターのパークレー城の書庫には、1316年にクルース奏者 Roger Wade から送られた親書が保管されている。その手紙の封蝋にはクルースの図像が描かれており、今日知られているクルースとほとんど変わらない形であることが確認できる。

14世紀ウェールズの詩人 Dafydd Bach ap Madog Wladaidd or Sypyn Cyfeiliog (fl.1340-90) の詩の中にもクルースが現れる。ここにはクルース音楽の楽しい情景が描かれている。

16世紀のヘンリー8世の宮廷にも、Robert Reynolds というウェールズ人クルース奏者が雇われていた。彼は1537年から1555年まで音楽家、弓兵として宮廷に仕えていた。

ウェールズのバルズたちは「アイステズヴォド eisteddfod」という会合を開き、詩人や音楽家としての能力を確認し、それに見合った称号を与えていた。

1523年と1567年にカーウィスで開催されたアイステズヴォドに参加した数多くのクルース奏者の名前とその称号が残されている。

ウェールズの歴史家 David Powell (1552? -1598) は、*The Historie of Cambria (1584)* の中で、ウェールズに存在した3種類の「ミンストレル」について記述している。第1のミンストレルは、詩人や作曲家であり、パウエルは彼らをバルズと呼んでいる。第2のミンストレルはハープとクルースの演奏家である。第3のミンストレルは、アトカニアイドと呼ばれ、楽器伴奏にのせて歌う人を指していた。

パウエルによると、クルースとハープの音楽は Gruffudd ap Cynan (c. 1055-1137) によってアイルランドからもたらされたという。それを裏付けるように、詩人、演奏家、朗読者という3つの分業による演奏様式は、アイルランドとウェールズに共通する音楽文化だった。

1595年のクリスマスに、13人のハープ奏者、クルース奏者、詩人が、デンビ近郊の Llewenni の館に招待されたという。この時彼らが演奏した80曲は、1曲を除いてすべてイングランドの音楽だった。この頃すでにバルズの音楽は衰退しつつあったと考えられる。

バルズが継承していた古いクルースの音楽は、北ウェールズ、グウィネズスの Bala のあたりによく残されており、同地の Dafydd Rowland of Llandrillo というクルース奏者が1684年頃に死亡するまでその伝統は続いていたとされる。

1665年、ハープ奏者 Robert ap Huw (c.1580-1665) の死とともに、バルズの古いハープ音楽は忘れ去られてしまった。彼が1613年頃に編纂したアルファベットで書かれた楽譜、つまり『ロバート・アプ・ヒュー手稿譜』は1720年に再発見されるが、この時この楽譜を解読できるものはいなかった。ダヴィズ・ローランドもこの約20年後に死亡しているので、ウェールズのハープとクルースによる古いバルズの音楽はこの頃、17世紀後半に失われてしまったと考えてよいだろう。

『ロバート・アプ・ヒュー手稿譜』の音楽では、Bray Harp と呼ばれる、意図的に耳障りなノイズを発生させる楽器が用いられていた。クルースもヴァイオリンなどと比べると倍音の多い耳障りな音がした。ウェールズの古いブレイハープやクルースが人気を失っていった背景には、聴衆の音楽に対する美意識が変化していったことが挙げられるのではないだろうか。たとえば17世紀後半に、古くからウェールズで演奏されていたブレイハープにとってかわり、華やかな音色の3列弦のハープが演奏されるようになった。このような新しい楽器と新しい音楽の流入によって古い音楽は刷新されていった。

クルースの場合はヴァイオリンがもたらされた後も細々と演奏され続けていたのだが、18世紀後半になると、かなり珍しい楽器となっていた。

イングランドの考古学者 Daines Barrington (1727/8 -1800) は1775年に、クルースが「今や完全に忘れ去られた楽器となっている」と述べ、アングルシー島 Newburgh の John Morgan というクルース奏者を最後の演奏者として記録している。彼は19世紀初頭まで活動していた。

エドワード・ジョーンズも1784年の著作で、かつてクルースは「ひじょうに心地よい旋律を奏で、ハープに対する高音域の伴奏としてよく用いられていたが、今やウェールズではきわめて珍しい楽器になってしまった」と書いている。

またビングリーは1800年に、「私はカーナーヴォンで偶然、クルースを持った老人に出くわした。彼は古い曲を少し演奏することができた。その音色はとても心地よいものとは言えず、かなり耳障りだった。その老人はおそらく、このウェールズの中でクルースの実践的な知識を持った最後のひとりだった」と記している。

古くからハープとともにウェールズ独自の音楽を培ってきたバルズの音楽が、17世紀を通して失われてしまったことは、クルースの衰退に大きな打撃を与えたに違いない。それと入れ替わるようにして、18世紀にヴァイオリンとともに新しい音楽がもたらされ、古い音楽に対する関心は相対的に薄れていったのだろう。

さらに、18世紀前半からウェールズで始まった「メソジスト・リヴァイヴァル運動」も、その当時すでに廃れつつあったクルース音楽にとどめをさす役割を果たしたのであろう。事実この運動の結果、楽器演奏や踊りが禁止されてしまったので、19世紀末にはヴァイオリンでさえ演奏されなくなっていたといわれる。

アイルランドにおけるアイリッシュ・ハープもクルースと同様に18世紀末に廃れつつあった。しかしこの楽器の場合は、アイルランドの国の紋章だったことやアイルランドの政治的状況もあって、愛国心と結びつけられた復興運動が起こった。しかし、クルースの場合は、エドワード・ジョーンズのように過去を懐かしむ声はあっても、それを復興させようという動きは見られなかった。

おそらく、それはビングリーが指摘しているように、クルースの音色が「耳障り」だと感じるように聴衆の美意識が変化してしまったからだと思われる。このきわめて個性の強い音色を一般の聴衆が受け入れられるようになるには、20世紀後半まで待たなければいけなかったのである。